

一生成香 「ロータリーの原点と心」 その2

研修リーダー 菊地 平

これも有名な話ですが、国際ロータリーの雑誌「The National Rotarian」の第1号巻頭言で、『若し、神の摂理によって、私がどこかのコロシラムの舞台に立たされて、皆さんと向かい合い、瞬時のためらいも許されず、あらんかぎりの声で何か一言、言えと告げられたら、私は躊躇する事無く大声で「寛容-Toleration-」と叫ぶであります。』と述べています。

「寛容」は彼にとって、重要なロータリーの心なのです。

戦争は、お互いが寛容でないために起こるというのです。それだけではないかもしれませんが、創立記念式典に、一般向けラジオ放送でスピーチしています。「もし信仰が違う人々が、カトリック、プロテスタント、ユダヤ教など、宗教が違う人々がロータリーで、同じテーブルに着くことが出来たら、どんなに素晴らしいことでしょうか」と。

彼の考える「寛容」は人間社会の基本に関わることであり、平和への道なのです。彼は人を非難する事を出来るだけ避けてきた、とも自分で言っています。ロータリーが今日の発展に繋がったのは、そのベースに「寛容」の精神があったからだと思います。

クリスチャンであったポール・ハリスやクリスチャンの多かったアメリカでは当然バイブルによって、生活を律してきたと思うのです。荒廃したシカゴの町だったからこそ、キリストの愛と許しの寛容の心が叫ばれたのかもしれませんが。バイブル・ガラテアの書には「愛・喜び・平安」の3つは、私たちと神との関係における「実」でしたが。「寛容・親切・善意」は私たちと他人との関係における「実」なのです。

では、日本で「寛容」とか「不寛容」とか言う時「日本的な寛容」と言うのがあると思います。「和を以って尊しとなす」とか「小異を捨てて大同につく」は日本的寛容ではないでしょうか。日本人には「神に許されて生かされている」というキリストの概念には及ばないからです。

ところがかつての中国の周恩来首相は「小異を捨ててのではなく」「小異を残して大同につく」のだと言っています。お国柄でしょうか。

今の日本には、時として「寛容」ということが、「てげてげ」だったり、「いいかげん」だったりしてはいませんか？

それも良しとするところが今の日本なのかも知れませんが、「寛容」は私達自身の心にあって、人を責めない、人を裁かないという個人尊重の、自分自身の反省に立った厳しい戒律といたしましょう。さいわい身近にある「4つのテスト」の実践からではないでしょうか。

(一部ロータリーの友)